

# ♪ シニア便り ♪

## ～ 林正輝団長を偲んで ～

【林先生を偲んで】	副団長・常任指揮者	中村 暁生
【林正輝先生との出会い】	トランペット	石井 邦紀
【林団長を偲んで】	サクソ	菊田 貴子
【林正輝先生との出会い】	トランペット	古川 亨
【林先生を想う - 出会いから今日まで - 】	オーボエ	吉田 和夫
【「故林団長」の詞に想う】	事務局長	伊藤 英明

事務局からのお知らせ

第23号 (2013年3月発行)

発行 北海道シニア吹奏楽団・事務局

編集 シニア便り・編集部



## 林正輝団長を偲んで



【林先生を偲んで】

副団長・常任指揮者

中村 暁生

当団を設立され、団長として私  
たちを今日まで導いて下さった  
林正輝先生が去る二月十日永眠  
されました。

昨春秋、病院に御見舞いに伺つ  
たときも団の近況の話に大変喜  
ばれ、お正月にもお元気とのご様  
子をご家族の方から伺っていた  
だけに創立二十周年を目前にし  
たご逝去はまことに残念でなり  
ません。心から感謝の念を捧げま  
すとともにご冥福をお祈り申し  
上げます。

### 林先生との出会い

今から約五十年前の昭和四十  
年、仙台市にある陸上自衛隊東北  
方面音楽隊にホルン奏者として  
勤務していた私は、ホルンと音楽  
理論のレッスンを海軍軍楽隊の  
出身で仙台放送管弦楽団におら  
れた菅野先生から受けていまし

た。

当時、仙台と札幌の放送管弦楽  
団の合同演奏会が隔年で仙台で  
開かれ、エキストラとして参加し  
た折、菅野先生と同じ海軍軍楽隊  
出身でファゴットを吹いていて  
席も近かった林先生に紹介され、  
打ち上げの席で言葉をかけてい  
ただいたことが最初の出会いで  
す。

その後、昭和五十二年から五年  
間の札幌勤務のあいだ北海道吹  
奏楽連盟の事務局長をされてお  
られた林先生とは吹奏楽を通し  
てお付き合いが深くなり、中の島  
のお宅にもよくお邪魔し、自衛隊  
記念日には「一日音楽隊長」など  
もやっていただきました。

東京消防庁音楽隊長時代には  
四年間、連盟理事長の林先生から  
コンクール道大会の審査員とし  
て呼んでいただきました。

### シニア吹奏楽団の設立

現役最後の年、平成三年のコン  
クールが終わった後、林先生と飲

みながら吹奏楽についていろい  
ろ話をしました。

吹奏楽コンクールが日本全国  
に吹奏楽を普及して演奏レベル  
を上げ、世界で通用する管打楽器  
奏者を数多く生み出す一方で、コ  
ンクールが終われば、音楽はもう  
終わり」という音楽嫌いを何十倍  
も作ってしまった。本当は音楽は  
生涯の友、楽器はプレーヤーの分  
身、宝でしょう。一生音楽を樂し  
む楽団を創りたいねと話が盛り  
上がり、私が「退職後札幌に住も  
うかなと思つています」と言つた  
ところ「それでは一緒にやらない  
か」との一言で私の札幌永住は決  
まってしまうました。

平成四年九月札幌に移住後、林  
先生が発起人代表となり全音楽  
器の植村さん、現団員の古川さん  
元団員の渡邊さんに私に加わり  
設立主旨のPRと団員の募集、規  
約(案)の作成、設立總會の準備を  
進め、平成五年六月二十六日ヤマ  
ハ音楽ホールで産声をあげたの  
です。

平成二十五年二月十日、私達北  
海道シニア吹奏楽団の創設者で  
あります林正輝団長が享年九十  
歳で、ご逝去されました。今号の  
シニア便りは、新年号の内容を変  
更改しまして、林団長を偲んで、  
生前親交のあった団員の方々か  
らの、林団長との思い出話や、お  
悔やみの言葉などを掲載させて  
頂きたいと思ひます。(編)

## 林先生の「ご遺志を継いで」

今私の手元に設立当時林先生が書かれた「吹奏楽愛好者の皆様へ」という設立に当たったの挨拶文があります。その中に「北海道初、全日本唯一の吹奏楽愛好者のための日本一楽しい吹奏楽団にするつもりです」と言うくだりがあります。また、団員募集案内の中で「音楽は生涯の友、楽器は私の宝、音楽を楽しむ、仲間と交流し、それを生活の糧とする豊かな人生のお手伝い、私達はそんな楽団を目指しております」とも書いておられます。

発足当時は一緒に演奏に参加され、ペルシャの市場ではソロを吹いていたとき、病を得てからも練習の時、演奏会や総会の折にも来られて私たちを激励し、活動を温かく見守ってくださった林先生、先生の当団に寄せられた想いとご遺志を改めて胸に刻み受け継いで、皆様とともに更に一歩ずつ進んで行きたいと思っています。

合掌

## 【林正輝先生との出会い】

トランペット 石井 邦紀

林先生と私の出会いは、私が北部方面音楽隊の隊員だったとき師事していた金子義人先生（元札幌トランペット奏者）との関わりの中でした。金子先生にとって林先生は、札幌教育大特音科での恩師であり、私は林先生の孫弟子に当たります。私は、高校時代、故小笠原繁先生（元道吹連理事長）に聴音とトランペットを習っていた関係で、当時新年を迎えると金子先生と共に、まず小笠原先生宅に年始の挨拶に伺い、その足で、同じ中ノ島に居を構えていた林先生宅にも同道したのが始まりでした。そのご縁で、後に私が北海道の中学校教員になり羽幌町の天売中学校に赴任し、吹奏楽部の指導者となったとき、当時の道吹連の事業で年一回講師の無料派遣を受けられる制度があり、林先生に札幌からJRの急行と羽幌港からの離島連絡船（当時カー

フェリーはなかった）を乗り継いで、天売島まで指導に来ていただきました。何せ、全校生徒四十三人の離島の学校に、道吹連の理事長が自ら指導にお出でいただいたのですから生徒たちは大感激、その指導の成果でその年のコンクール留萌大会では金賞の一枚に入ることができました。その時に、林先生は「石井君、音楽が好きになる指導をしなさい。コンクールで賞を取ること、上の大会に行くことが大切なのではない。」と教員に成り立てで、コンクールに目を奪われていた私に諭して下さいました。当時はそれでも、周囲の期待もあり、コンクールで金賞を取らせる指導を重ねていきましたが、今では林先生のお考えの大切さが身に沁みて分かり、自分の吹奏楽指導者としての根幹となつていきます。今後、北海道シニア吹奏楽団を中心に、機会が与えられれば、その他の活動も併せ、音楽を生涯に渡って楽しんでいく為のお手伝いと、すそ野の拡

大をライフワークとしていきたいと思つていきます。それが、私の林先生への恩返しと思つていきます。

合掌

## 【林団長を偲んで】

サククス 菊田 貴子

私にとって、「林団長」というより「林先生」と言った方がしっくりします。

初めて先生にお会いしたのは、キクヤの音楽スクールです。そこでサククスの講師をされていたのが林先生でした。初めてレッスンを受ける私に「君はプロを目指してる？でなければ楽しく音楽しましょう」とおっしゃいました。基本的な事と、あとは私が楽しく演奏出来るよう指導して頂きました。

いつも先生は「楽しく」ということにこだわり、そして「お金がかからないように」と教本一つ買うにもキクヤの方に安くなるよ

う交渉してくれたりしました。

レッスンの合間に先生のお話を少し聞く事がありました。その中で、音楽で生計を立てていた先生にとって音楽は楽しいだけではなかったようです。音楽でお金を頂くとこの事は、私が想像するより大変なのだと思いました。先生のおかげで、レッスンは辛い事など無く楽しく通う事が出来ました。

今、先生の事を思い出し浮かんでくるのは、レッスンの時のピアノ伴奏……。あまり繊細とは言えない、おおざっぱなピアノ伴奏。あの伴奏が好きでした。それと、「君は……」という時の林先生独特のイントネーションが大好きでした。まだ耳に残っています。

今は身体も自由になり、好きな音楽でおいしいお酒を遠い空の上で飲んでいると思います。

### 【林正輝先生との出会い】

トランペット 古川 亨

私と林正輝先生との出会いは一九六八年(昭和四十三年)五月の連休明け頃と記憶しており、私が高校二年生になったばかりでした。私が入学いたしました北海道高校には、一年生当時、吹奏楽部がありませんでした。吹奏楽部がある高校への転校を担任に伝えたと、「他にやりたい人が数人いれば、楽団の設置は可能だから転校はしなくてもいい。」とのことで、二年に進級して間もなく、吹奏楽部が立ち上がりました。合奏の外部指導者として先生がこられました。

当時の先生の肩書きは、北海道吹奏楽連盟事務局長、NHK札幌放送管弦楽団員という紹介で掲示されていました。先生には全般的に合奏の指導をしていただきました。

私も、先生のご指導があつて今日まで、楽器の演奏を楽しませて

いただいているところです。

今、改めて、先生との交流を振り返ってみると、この時から数えて、実に四十五年になる事がわかりました。

高校を卒業してからも、お付き合いをしていただき、このシニア吹奏楽団の設立時にも不詳の私にも声がけをして下さり、当時住まわれていました中の島のご自宅、楽団設立の案内状及び規約(すでに、鉛筆書きにて完成済み)をワープロで打ち込み、中村暁生先生、渡辺順三さんの四人で設立の準備を致しました。

先生のこの楽団の設立の大きな狙いは、「リタイヤした沢山の人が再び、音楽を愛してもらおう」とであり、その想いが、シニア吹奏楽団の中に今も脈々と受け継がれていると思います。

過日、先生に病院でお会いしました折、「二十周年演奏会に行きたいな!」とおっしゃっていました。が、実現することが出来ず、さぞ無念だろうと思われれます。私も、

とても残念に思います。そんな先生との思い出を、雑駁に記してみました。

先生のご冥福をお祈りし、筆をおきます。

### 【林先生を想う】

出会いから今日まで  
オーボエ 吉田 和夫

出会い  
先生との出会いは、昭和二十五年、私が高校二年の時だった。クラリネットを教わるため中島公園脇にあったNHK放送局の放送管弦楽団の控室に通っていた。そこに、ファゴット奏者の林先生がいた。

何かのキツカケでお話をするようになったのが最初の出会いであった。先生が海軍軍楽隊出身であったことから当時の話を聞くことが楽しみでもあった。

先生は、市内の高校や中学校の

吹奏楽の指導者でもあり、他の方と指導に回り音楽技術の向上に努められた。また、先生の提唱により、高校生による札幌青少年吹奏楽団が設立された。夏の催し会場で演奏を披露したこともあったが、夫々が卒業したことにより消滅した。

その後、林先生が主体となって、北海道吹奏楽連盟を立ち上げ、昭和二十九年に第一回の吹奏楽コンクールが開催され、今日まで綿々と続いている。永年連盟の理事長を努められ、北海道の音楽文化の向上と普及に大きく貢献されたのである、その功績は大いなるものがある。

シニアとの係わり

ある日、退職して第二の職場に林先生から「今度、北海道シニア吹奏楽団を創るから、君を発起人に入れておくから」「チョット待ってください、楽器もないし、四十年も吹いていないし・・・」「いや、いいんだ、とにかくそうした

から」とのやり取りがあった。

第一回の演奏会が教文会館で開催された、そのプログラムにクラリネットに名を連ねてあった。驚いた、困った、第二回も同じであった。そこで、フルートを購入して、ヤマハに通った。少し音が出たので、第三回からフルートに名を連ねた。しかし、思うように音が出ない。林先生に、オーボエについて相談したところ、早速キクヤに楽器と初心者用ビデオを手配してくれた。更に、オーボエの専門家札幌大学音楽監督の今井先生を紹介していただいた。

先生曰く、  
「上手に吹くと思うな。」

音符一つ一つを正確に「

教訓

叱咤激励

平成七年、職場の不祥事で職を辞し、家に閉じこもり、シニアにも行けず悶々としていたある日、真駒内駅で先生に偶然お会いした。事情をよく承知していたこと

から「お前何もしていないのか、こんな時こそ、音楽に打ち込め、皆んな歓迎するから」と激励してくれ、シニアも快く受け入れていただき、日鉄会館の練習に参加するようになった。林先生の一声がなかったら今の私はいない。

感謝

ねがう

出会いから今日まで、先生には、いろいろのご指導、ご鞭撻、御厚情を賜り厚く深く感謝申し上げますところである。

願わくば、第二十回の演奏を見て聴いてほしかった、誠に残念の一言である。

林先生が創られたシニアも二十年を迎え、成長した姿を天国から暖かく見守っていただくことを。

心からご冥福をお祈りする。



【故林団長】の詞に想つ】

事務局長 伊藤英明

私は林団長と話をしたことが無いのではと思っておりますが、ホルンの練習中にふっと思い出しました。それは、私の入団直後に団長がオークラホール練習場に顔を見せた時のことだと思います。

「君の楽器は何なの？」

「ホルンです。」

「ホルンを始めてどのくらい？」

「入団してから始めました。」

「先生には付いているの？」

「札幌の先生に付いています。」

「そう・・・、続けなさい。」

こんな会話だったと思います。

あれから、6年。最近は家族のことや、シニア事務局のこと、毎日のバタバタの中で楽器に触ることのない日もでてきてしまいました。そんな中、自分が音楽をやっている意味の再確認を、と思い、「北海道シニア吹奏楽団」設立15周年記念誌「絆」を読み返



平成五年北海道シニア吹奏楽団を創立され、団長に就任、今日に至っております。

### 主な受章歴

昭和五十三年 藍綬褒章

平成八年 勲五等雙光旭日賞

(平成七年三月六日、十勝毎日新聞勲紹介記事より)

文責 古川 亨

### 北海道シニア吹奏楽団

発足について

北海道シニア吹奏楽団は、当時北海道吹奏楽連盟会長の林正輝先生の呼びかけにより、平成五年六月二十九日(日曜日)札幌ヤマハホールにおいて楽団の設立総会を開催し、総勢六十八名もの有志が集い、北海道シニア吹奏楽団が発足いたしました。この席において、団長に林正輝氏、副団長及び常任指揮者に中村暁生氏を選出しました。

(北海道シニア吹奏楽団十五周年記念誌より抜粋)

### 林団長よりシニア吹奏楽団

への寄贈楽器

ファゴット 一本  
アルトサクソ 一本  
クラリネット 一本

### 事務局からのお知らせ

総会開催のお知らせ

日時

二十五年五月十九日(日)

総会 十五時

懇親会 十七時

場所

中村屋旅館

札幌市中央区

北三条西七丁目

懇親会会費

四千元

(懇親会参加者のみ)

### 編集余録

三月に入っても暴風雪が続き、悪天候により練習がお休みになつてしまうほど長く厳しかった冬がようやく緩み、待ち遠しかった春の声が聞こえてきました。

出会いと別れの季節であるこの時期、歓送迎会等も多く、季節の変化と相まって体調を崩しやすいので皆様風邪などには気を付けましょうね。

そして当団の創始者、林団長の訃報は入団暦の浅い私にとっても大きな衝撃でした。それを思うと親交の深かった方々におかれましては、その心痛はいかほどか察するに余りあります。

『明けない朝はない』いつかは春がやってくる。私の座右銘ですが、この悲しみを乗り越えて、益々北海道シニア吹奏楽団が皆様の生き甲斐であり続けられるように心から祈ってやみません。ご冥福を心よりお祈り申し上げます。(祈) (石田)

私がシニア吹奏楽団に入団したのは、団の雰囲気魅かれたのはもちろんのこと、当時の事務局長・渡邊さんが、上手い下手よりも楽しんでやるのが大切と教えて下さったからです。その後、まともに吹けぬまま入団してしまい苦労もありますが、林団長が音楽を楽しめるように創られた団と色々な方から伺い、励まされ、今があり大変感謝しております。心からお悔やみ申し上げます。(長土居)

今回シニア便りの編集に携わらせて頂き、改めてシニア吹奏楽団設立に対する林団長の想いを知りました。「音楽は生涯の友」「音楽を楽しんで仲間と交流する」今まさに私は、シニア吹奏楽団の幅広い年齢層の方々と、共に吹奏楽を楽しんでいます。このような場を与えてくださった林団長に本当に感謝しております。心よりご冥福をお祈り申し上げます。(池内)